



第 2 表 レイホウより分離されたいもち病菌の菌型 (1972)

採 集 場 所	地点数	供 試 菌株数	菌 型			
			T-2	N-2	N-3	O
大分県 日田市	1	11	0	11	0	0
〃 宇佐市	1	10	10	0	0	0
〃 中津市	1	3	3	0	0	0
佐賀県 佐賀郡	1	3	3	0	0	0
〃 伊万里市	1	4	4	0	0	0
長崎県南高来郡	1	5	0	1	4	0
熊本県 球磨郡	2	10	10	0	0	0
宮崎県東諸県郡	1	5	0	5	0	0
鹿児島県大口市	4	23	22	0	0	1
〃 伊佐郡	2	5	5	0	0	0
計	15	79	57	17	4	1

て判定した。

供試菌は15地点、延79菌株を用い、その菌型調査を行った結果は第2表のとおりである。

第2表に示すように供試した15地点、延79菌株中、大分県では2地点13菌株、佐賀県2地点7菌株、熊本県2地点10菌株、鹿児島県6地点27菌株の計12地点、延57菌株(72.2%)が T-2 菌型であった。このうち大分県宇佐市で採集された2菌株が、ほまれ錦と銀河に病斑を形成しなかったが、Tadukan にM、鳥尖にS反応を、他の日本稲ならびに参考品種の Pi No. 1 およびレイホウにS反応を示したので、T-2 菌型とした。その他の菌株は明らかに T-2 菌型の反応を示した。

なお、九州地域における T-2 菌型は、1959年に大分県と鹿児島県下ではじめて認め、その分布は極めて少なかったが、1967年頃より、クジュウ、トヨタマ、金南風、日本晴などを中心に増加の傾向を認め、1970年には10%前後の検出率となった。これが、その後のレイホウなどの作付増加と関連して、今回の発病となったものと考えられる。

この外、N-2、N-3 およびO菌型が認められたが、これらについては採集地点が限られていることから、品種自体についての検討も必要と思われるので、再検討することにした。

なお、レイホウのいもち病菌の各菌型に対する反応を檢定した結果を示すと第3表のとおりである。すなわち、レイホウは T-2 菌型に罹病性の S 反応を示し、C-1、C-3、N-2 および N-5 菌型に抵抗性の R 反応を示した。これと同じ反応を示す品種は西海 104 号、南海 39 号および南海 46 号の 3 品種で、いずれも Tadukan の抵抗性遺伝子 (Pi-ta) をもつ Pi No. 3 または Pi No. 5 との組合せにより育成された品種である。レイホウも組合せ



第 1 図 大分県宇佐市におけるいもち病 T-2 菌型によるレイホウの発病

第 3 表 レイホウのいもち病菌菌型に対する反応 (1970)

T-2 研62-89	C-1 研60-19	C-3 長87	N-2 研64-38	N-5 長61-14	その他の 該当品種
S	R	R	R	R	西海104号 南海 39 号 南海 46 号

(西海62号×綾錦) は異なるが、反応型は同一であり、これらに類似した性質をもっているものと推定される。

## 2. 総 括

(1) 九州における有望品種として普及されたレイホウが普及3~4年後の1972年に九州各地でいもち病に、はげしくおこされる事例が確認されたので、その菌型調査を行った。

(2) 大分県をはじめ、佐賀県、熊本県ならびに鹿児島県のレイホウから採集された12地点、延57菌株が T-2 菌型であった。この外、N-2、N-3 菌型とO菌型が分離された。

(3) さらにレイホウの各菌型に対する反応型をみた結果からすると、インド型稲の抵抗性遺伝子 Pi-ta2 をもっているのではないかと考えられるので、クサブエ・千秋楽などシナ稲系の高度抵抗性品種が普及2~3年後に罹病化した例と傾向を一にし、今後も発病が懸念されるので、十分注意する必要がある。なお、本問題についてはさらに追求する。

## 参 考 文 献

- 1) 農林省植物防疫課(1972) 農作物有害動物発生予察特別報告24, 166-203.
- 2) 藤川隆・富来務・佐藤俊次(1970) 大分県におけるいもち病高度抵抗性品種クサブエ・千秋楽の発病について、大分県農業技術センター、技術報告1, 1-4.
- 3) 岡留善次郎・藤川隆・富来務(1965) 九州におけるいもち病菌の菌型について、九州病害虫研究会報, 11, 23-25.
- 4) 岡留善次郎・藤川隆・富来務(1967) 九州におけるいもち病菌の菌型について(その2)、九州病害虫研究会報, 13, 1-2.